

高知県立大学大学院看護学研究科修了生による教育課程評価

大川宣容¹、坂元 綾²、山田 覚¹、畦地博子¹

(2022年9月26日受付, 2022年12月14日受理)

Evaluation of the Curriculum by Graduates of the Graduate School of Nursing, University of Kochi

Norimi OKAWA¹, Aya SAKAMOTO², Satoru YAMADA¹, Hiroko AZECHI¹

(Received : September 26, 2022, Accepted : December 14, 2022)

要 旨

修了生を対象として、教育課程評価および大学院で修得する能力が修了生の現在の活動にどの程度必要とされるかを明らかにすることにより、本学看護学研究科の教育の強みや特色、課題を把握し、大学院教育の改善ならびに、教育の質を向上するための資料とすることを目指した。2021年3月以前の本学大学院看護学研究科の修了生、博士前期課程（修士課程を含む）修了生270名、および博士後期課程（健康生活学研究科看護学領域を含む）修了生61名を調査対象とした。修了生の属性、教育に関する満足度、DPに基づく教育内容の適切性、DPの能力が現在の活動で必要とされる程度、自由記載で構成される調査票を送付し、郵送またはWebアンケートによる回答を依頼した。博士前期課程修了生142名（回収率52.6%）、博士後期課程修了生29名（回収率47.5%）から回答を得た。現在の活動や業務にDPの能力が必要とされる程度は、最も低い項目でも3.22、博士後期課程ではすべての項目が3.55以上であり、看護学研究科のDPは、修了生に必要な能力の設定となっていると評価することができる結果であった。

キーワード：大学院教育、修了生調査、カリキュラム評価

Abstract

The purpose of survey of alumni was to evaluate the educational program and to determine the extent to which the competencies acquired in graduate school are required for the alumni's current activities. The survey covered 270 graduates of the Graduate School of Nursing, 270 graduates of the Master's Program, and 61 graduates of the Doctoral Program before March 2021. A questionnaire consisting of items such as attributes of graduates, satisfaction with education, appropriateness of educational content based on the DP, degree to which DP competencies are needed in current activities, and free responses was mailed, and responses were requested either by mail method or through a web-based survey. Responses were received from 142 master's course graduates (52.6% response rate) and 29 doctoral course graduates (47.5% response rate). The degree to which the DP competencies are required for current activities and work is 3.22 for the lowest item and 3.55 or higher for all items in the doctoral program, indicating that the Graduate School of Nursing's DP is a set of competencies required for graduates.

Key Word : Evaluation of Curriculum, Survey of Alumni, Higher Education, Graduate Programs

¹ 高知県立大学看護学部看護学科 教授
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Professor

² 高知県立大学看護学部看護学科 助教
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Assistant Professor

I. はじめに

大学院は、高度な専門的知識・能力を持つ高度職業人を養成する役割をもち、高等教育の中でもとりわけ知識集約型社会における知の生産、価値創造を先導する「知のプロフェッショナル」を育成する役割を中心的に担うことが期待される（中央教育審議会、2019）。2040年に向けた高等教育のグランドデザインにおいて（中央教育審議会、2018）、大学院は、個々の教員のレベルを越えた組織として、学生の進路や就職などに対する意識が十分とは言えないという指摘があり、養成する人材の需要について調査・把握するとともに、修了者の状況を追跡しその状況を踏まえた上で人材育成を進めていく必要がある。大学は、学生や社会のニーズをふまえ継続してカリキュラムを検証・改善し大学院教育の充実を図ることが求められている。

本学看護学研究科看護学専攻は、1998年に修士課程開設、2014年に博士前期課程・博士後期課程をもつ看護学専攻に再編した。博士前期課程では、高度実践看護師コース、研究コース、臨床看護研究コース（2014年実践リーダーコースへと拡充）、実践リーダーコースを設置し、それぞれの現場で活躍する高度専門職業人の育成と実践的研究を行う研究者育成に取り組んできた。博士後期課程は創造的に自立して研究活動を行う高度な専門能力をもった研究者の育成を行ってきた。これらの教育成果を可視化するために、博士前期課程は2019年度より、博士後期課程は2021年度より修了時ディプロマ・ポリシー（以下DPとする）の修得状況評価（自己評価）を実施してきた。

呉ら（2021）は、修了者と採用先における修了生の評価や大学院の教育の効果および学修成果を明らかにし、大学院の教育成果を捉える観点を検討しており、その教育を経験した修了生の調査、特に修了後一定の期間を社会で過ごした者を追跡し比較することの必要性を示している。従って、修了生を対象として、教育課程評価および大学院で修得する能力が修了生の現在の活動にどの程度

必要とされるかを明らかにすることにより、本学看護学研究科の教育の強みや特色、課題を把握し、大学院教育の改善ならびに、教育の質を向上するための資料とすることができる。

II. 調査目的

本学修了生を対象に、DPの能力に沿って看護学研究科の教育課程の評価を得るとともに、修了生が必要とする能力を明らかにし、教育改善ならびに、教育の質を向上するための示唆を得ることを目的とする。

III. 調査方法

1. 対象者

1) 博士前期課程

2000年3月～2021年3月に本学大学院看護学研究科修士課程もしくは博士前期課程を修了した290名のうち連絡先が分かる270名を調査対象とした。

2) 博士後期課程

2003年3月～2021年3月に本学大学院健康生活科学研究科博士後期課程もしくは看護学研究科博士後期課程を修了した61名を調査対象とした。

2. 調査期間

2021年8月～9月

3. 調査の実施

修了生に、依頼文書と調査票と返信用封筒を送付し、Webでの回答あるいは調査票の返送による方法のいずれかを選択するように依頼した。メールアドレスが分かる修了生に対しては、同じ依頼内容をメールでも送信した。Webアンケートは、Google Formsを使用した。

4. 調査内容

調査票は、修了生の属性（修了した専攻コース；博士前期課程、修了した研究科；博士後期課程、

修了年度、現在の勤務先、職場での立場について)、教育に関する満足度、DPに基づく教育内容の適切性、DPの能力が現在の活動で必要とされる程度、自由記載で構成した。

1) 博士前期課程修了生調査票

(1) 教育に対する満足度

看護学研究科の教育に対する満足度は、教育課程(カリキュラム)について、講義について、研究指導について、実習指導について、それぞれ「4:満足している」「3:まあまあ満足している」「2:あまり満足していない」「1:満足していない」の4段階で尋ねた。

(2) 博士前期課程で修得する能力

①DPに基づく教育内容の適切性

看護学研究科博士前期課程の6つのDPに対しそれぞれ3項目ずつ修得する能力として18項目を挙げた(以下、博士前期課程で修得する能力とする。表6)。修士課程・博士前期課程の教育は、博士前期課程で修得する能力が身につく教育内容であったかを、それぞれ「4:そう思う」「3:ややそう思う」「2:あまりそう思わない」「1:そう思わない」の4段階で尋ねた。

②DPの能力が必要とされる程度

博士前期課程で修得する能力について、現在の業務や活動で必要とされる程度を「4:必要」「3:やや必要」「2:あまり必要でない」「1:必要でない」の4段階で尋ねた。

2) 博士後期課程修了生調査票

(1) 教育に対する満足度

看護学研究科の教育に対する満足度は、教育課程(カリキュラム)について、講義について、研究指導について、それぞれ「4:満足している」「3:まあまあ満足している」「2:あまり満足していない」「1:満足していない」の4段階で尋ねた。

(2) 博士後期課程で修得する能力

①DPに基づく教育内容の適切性

看護学研究科博士後期課程の6つのDPに対し

それぞれ3項目ずつ修得する能力として18項目を挙げ(以下、博士後期課程で修得する能力とする。表10)た。博士後期課程の教育は、博士後期課程で修得する能力が身につく教育内容であったかを、それぞれ「4:そう思う」「3:ややそう思う」「2:あまりそう思わない」「1:そう思わない」の4段階で尋ねた。

②DPの能力が必要とされる程度

博士後期課程で修得する能力について、現在の業務や活動で必要とされる程度を「4:必要」「3:やや必要」「2:あまり必要でない」「1:必要でない」の4段階で尋ねた。

5. 分析方法

博士前期課程、博士後期課程に分けて分析し、教育に対する満足度、教育課程で修得する能力についてそれぞれ記述統計量を算出した。データ分析には、SPSS25.0J for Windowsを用いた。

6. 倫理的配慮

本調査は、看護学研究科の教育の質保証のために実施したものである。依頼文書及びWebアンケートの回答ページに、調査の目的、方法、協力の任意性、匿名性の保証について説明した。また、調査票の返送もしくはWebアンケートの送信をもって、調査協力に同意が得られたとみなすことを記載した。

IV. 結果

1. 博士前期課程について

1) 配布及び回収数

2021年3月までに看護学研究科修士課程、博士前期課程を修了した270名に配布し、142名(回収率52.6%)から回答を得、有効回答の142名(有効回答率100.0%)を分析対象とした。調査票の返送58名、Webでの回答84名であった。

2) 対象者の概要

対象者が修了した専攻コースは、専門看護師

コース100名(70.4%)、研究コース14名(9.9%)、実践リーダーコース13名(9.2%)、臨床看護研究コース14名(9.9%)であった(表1)。修了年度は、2011~2015年が最も多く44名(31.0%)であった(表2)。現在の勤務先は、医療機関・訪問看護が最も多く87名(61.7%)で、次いで教育・研究機関46名(32.6%)であった(表3)。現在の職務上の立場は、専門看護師が最も多く43名、次いで大学教員38名であった(表4)。

3) 博士前期課程の教育に関する満足度

博士前期課程の教育に関する満足度の平均値を表5に示した。4項目において満足度が最も高かったのは、研究指導であり、次いで教育課程、講義、実習指導の順であった。

4) 博士前期課程で修得する能力(表6)

(1) DPに基づく教育内容の適切性

全体の平均値は、3.36(0.64)であり、DP5の14)研究に関わる倫理的問題への対応に関する項目が

最も高く3.57(0.58)、続いてDP1の1)対象を多角的に捉えることに関する項目が高く3.56(0.65)であった。最も平均値が低い項目はDP6の17)異なる文化への感受性に関する項目であり2.86(0.70)、次いで16)グローバル社会における健康問題に関する項目2.94(0.66)であった。図1に各項目の回答の構成比を示した。

(2) DPの能力が必要とされる程度

現在の業務や活動にDPの能力が必要とされる程度の全体の平均値は、3.61(0.59)であり、DP3の7)互いを尊重したコミュニケーションに関する項目3.86(0.37)と、8)他職種に対する看護の意図の説明と協働に関する項目3.86(0.39)の平均値が最も高かった。平均値が最も低かったのは、DP6の16)グローバル化における健康問題に関する項目3.22(0.81)であり、次いで17)異なる文化への感受性に関する項目3.27(0.81)であった。図2に各項目の回答の構成比を示した。

表1 博士前期課程：修了した専攻コース

	専門看護師コース	研究コース	実践リーダーコース	臨床看護研究コース
n(%)	100(70.9)	14(9.9)	13(9.2)	14(9.9)

表2 博士前期課程：修了者の修了年度

	2005年度以前	2006~2010年度	2011~2015年度	2016~2020年度
n(%)	26(18.3)	39(27.5)	44(31.0)	33(23.2)

表3 博士前期課程：修了生の現在の勤務先

	医療機関・訪問看護 ステーション	県、市行政機関	教育・研究機関	現在は就業して いない	その他
n(%)	87(61.7)	4(2.8)	46(32.6)	2(1.4)	2(1.4)

表4 博士前期課程修了生：現在の職務上の立場

職務上の立場	n
スタッフ	37
中間管理者	34
部門責任者	16
専門看護師	43
認定看護師	8
大学教員	38
その他	2

※複数選択

表5 博士前期課程の教育に関する満足度の比較(n=142)

項目	n	平均値(SD)
教育課程	142	3.54(0.57)
講義	142	3.49(0.68)
研究指導	142	3.67(0.66)
実習指導*	96	3.38(0.84)

※実習指導は専門看護師コースのみ

表6 博士前期課程で修得する能力

項目	教育内容の適切性 (n=142)	現在の業務や活動で必要とされる能力の程度 (n=142)	
	平均値(SD)	平均値(SD)	
DP1	1) 対象を個人-家族-地域の連続性の中で多角的に捉え、意図的に看護を実践する	3.56(0.65)	3.85(0.40)
	2) 看護の諸理論、倫理に関する理論を活用して、看護介入を計画し実践・評価する	3.46(0.64)	3.65(0.56)
	3) 提供されている医療の倫理性を判断して、看護を実践する	3.47(0.65)	3.83(0.43)
DP2	4) 地域ケアシステムの課題について分析し、改善に向けた方策を提案する	3.12(0.67)	3.47(0.71)
	5) ヘルスプロモーションの理念に基づき、地域の人々や多職種と協働して、健康の保持・増進に取り組む方法を提案する	3.30(0.70)	3.57(0.65)
	6) 地域の人々や地域文化のもつ健康に対する習慣や価値観を把握し、看護を実践する	3.25(0.70)	3.56(0.59)
DP3	7) 互いを尊重したコミュニケーションにより他職種の認識を把握し、対象者を中心にケアを調整する	3.53(0.64)	3.86(0.37)
	8) 他職種に対して看護の意図や必要性を説明し、協働する	3.54(0.63)	3.86(0.39)
	9) 社会における健康課題を明確にし、多職種と協働して解決に導く方略を考案する	3.28(0.68)	3.60(0.61)
DP4	10) 看護を個と組織の両面からシステムとしてとらえて説明する	3.54(0.55)	3.77(0.50)
	11) 集団や組織の場のダイナミクスを分析し、集団や組織を動かすための方略を立てる	3.47(0.62)	3.83(0.43)
	12) ケアの質を改善するために、組織の目標を共有してメンバーが力を発揮できるように働きかける	3.41(0.62)	3.83(0.41)
DP5	13) 既存の研究論文を批判的に吟味し、評価する	3.49(0.62)	3.37(0.78)
	14) 研究に関わる倫理的問題について考慮し、必要な対応を行い研究を遂行する	3.57(0.58)	3.47(0.78)
	15) 専門領域における課題を探究し、適切な研究方法・デザインを用いて研究を行い、知見を論文としてまとめる	3.52(0.66)	3.41(0.73)
DP6	16) グローバル社会における人々の健康問題を俯瞰し、文化や歴史的背景を含めて説明する	2.94(0.66)	3.22(0.81)
	17) 異なる文化への感受性を高め、文化を考慮した看護支援に取り組む	2.86(0.70)	3.27(0.81)
	18) 多様化・複雑化する人々の健康ニーズに対応する看護の可能性について説明する	3.19(0.65)	3.61(0.64)
全体	3.36(0.64)	3.61(0.59)	

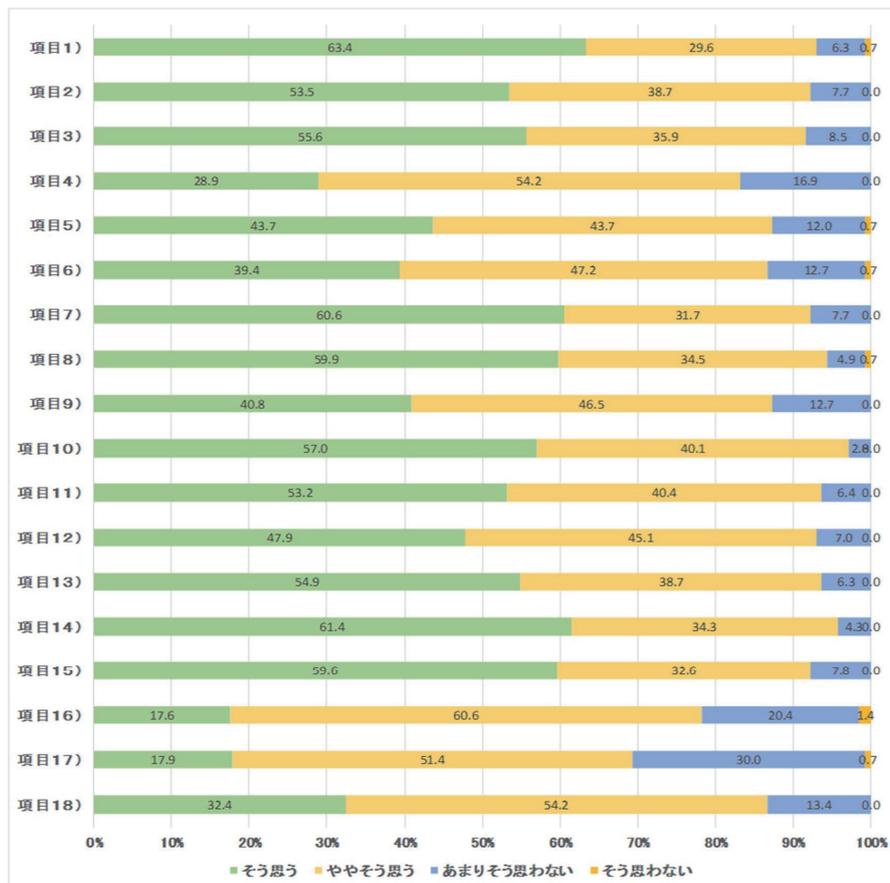


図1 博士前期課程のDPに基づく教育内容の適切性回答の構成比

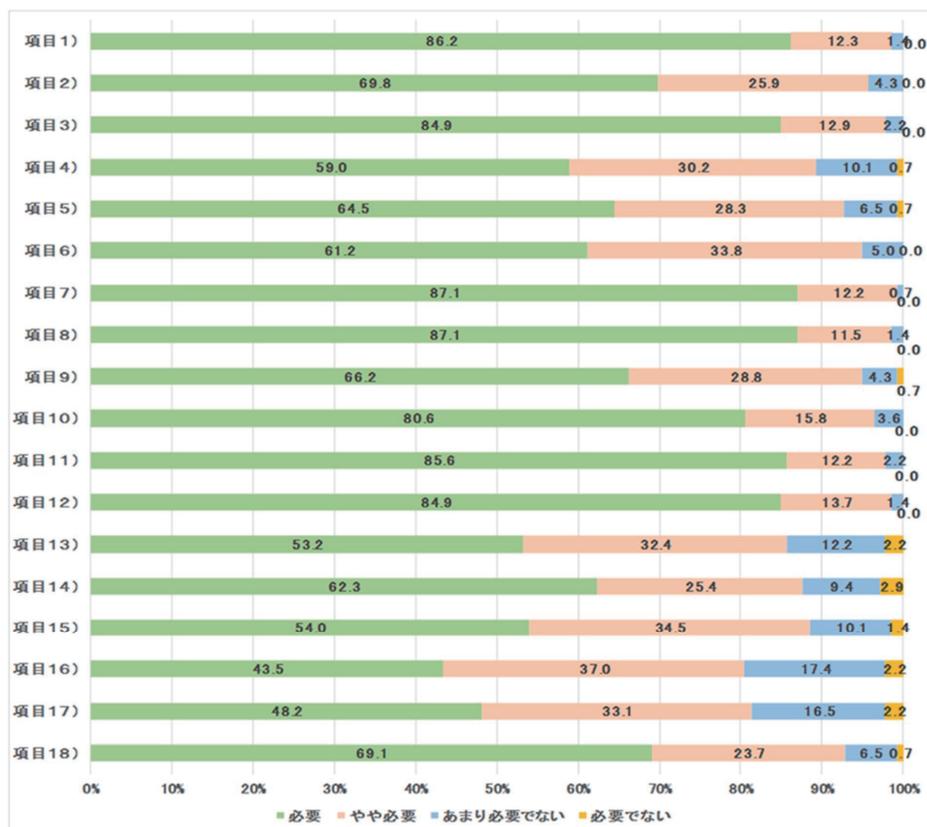


図2 博士前期課程：現在の業務や活動でDPの能力が必要とされる程度回答の構成比

2. 看護学研究科博士後期課程について

1) 配布及び回収数

2021年3月までに健康生活科学研究科看護学領域もしくは看護学研究科博士後期課程を修了した61名に調査票を配布し、29名(回収率47.5%)から回答を得、有効回答の29名(有効回答率100.0%)を分析対象とした。調査票の返送14名、Webでの回答15名であった。

2) 対象者の概要

対象者が修了した研究科は健康生活科学研究科13名(44.8%)、看護学研究科15名(51.7%)、無回答1名(3.4%)であった。

修了年度は、2015～2017年が最も多く9名(31.0%)であった(表7)。現在の勤務先は、教育・研究機関が25名(86.2%)、医療機関・訪問看護が3名(10.3%)、現在は就業していない1名(3.4%)であった(表8)。現在の職務上の立場は、ほとんどが大学教員であった(表9)。

2) 博士後期課程の教育に関する満足度

博士後期課程の教育に関する満足度の平均値を表10に示す。3項目において満足度が最も高かったのは教育課程であり、次いで講義、研究指導の順であった。

3) 博士後期課程で修得する能力(表11)

(1) DPに基づく教育内容の適切性

全体の平均値は、3.42(0.64)であり、DP3の8)倫理的・文化的視点を踏まえて、研究や実践を通して新たな見解や知識を生み出すという項目3.69(0.54)と、9)人々の安心な生活の実現やQOLの向上を推進するための方略を研究的な視点から考案するという項目3.64(0.56)の平均値が高かった。平均値が最も低い項目はDP3の7)最新の看護学の知識や技術、看護関連分野の知見等を自らの活動と関連付けて説明するという項目2.55(1.12)であった。この項目は標準偏差も他の項目に比して大きく、評価の個人差がうかがえた。次

表7 博士後期課程修了者：修了年度

	2003～2005	2006～2008	2009～2011	2012～2014	2015～2017	2018～2020
n (%)	2 (6.9)	3 (10.3)	1 (3.4)	8 (27.6)	9 (31.0)	6 (20.7)

表8 博士後期課程：修了生の現在の勤務先

	教育・研究機関	医療機関・訪問看護 ステーション	現在は就業して いない
n (%)	25 (86.2)	3 (10.3)	1 (3.4)

表9 博士後期課程修了者：現在の職務上の立場

職務上の立場	n (%)
スタッフ	1 (3.4)
看護部長・副看護部長	1 (3.4)
専門看護師	2 (6.9)
大学教員	24 (82.8)
無回答	1 (3.4)

表10 博士後期課程の教育に関する満足度
(n=29)

項目	平均値 (SD)
教育課程	3.79 (0.41)
講義	3.76 (0.44)
研究指導	3.62 (0.68)

表11 博士後期課程で修得する能力

項目		教育内容の 適切性 (n=29)	現在の業務や 活動で必要と される能力の 程度 (n=29)
		平均値 (SD)	平均値 (SD)
DP1	1) 自らが基盤とする理論や哲学について語る	3.55 (0.51)	3.72 (0.53)
	2) 看護の将来を見通し看護学の発展に向けて行動する	3.55 (0.51)	3.79 (0.41)
	3) 他の学問分野の見解も含め看護の知識を多面的に検討し論述する	3.45 (0.57)	3.76 (0.51)
DP2	4) 看護学の学術性を高めるうえでの研究や教育の課題を説明する	3.55 (0.57)	3.79 (0.49)
	5) 国際的・学際的な視点を踏まえて、看護学の知識や技術に関する研究を計画し実施する	3.34 (0.67)	3.55 (0.69)
	6) 看護学の学術的な基盤発展に自らが貢献していくためのビジョンを示す	3.36 (0.62)	3.59 (0.63)
DP3	7) 最新の看護学の知識や技術、看護関連分野の知見等を自らの活動と関連付けて説明する	2.55 (1.12)	3.83 (0.47)
	8) 倫理的・文化的視点を踏まえて、研究や実践を通して新たな見解や知識を生み出す	3.69 (0.54)	3.82 (0.48)
	9) 人々の安心な生活の実現や QOL の向上を推進するための方略を研究的な視点から考案する	3.64 (0.56)	3.59 (0.73)
DP4	10) 専門領域において創造的な研究活動を計画的に行う	3.52 (0.63)	3.66 (0.72)
	11) 研究成果や実践における実績を社会に還元する	3.45 (0.69)	3.83 (0.38)
	12) 論文投稿や発表を通して、看護学の価値を社会に伝える	3.52 (0.69)	3.76 (0.51)
DP5	13) 現行の制度やシステムについて、国内外の専門職との連携の視点から自己の見解を示す	3.03 (0.68)	3.66 (0.61)
	14) 専門領域を発展させていく役割と責任感をもって活動する	3.59 (0.57)	3.79 (0.49)
	15) 専門領域の健康医療福祉システムの課題解決や変革について、自らの見解を示す	3.31 (0.60)	3.69 (0.54)
DP6	16) 新しいエビデンスや看護学の知見を次世代に伝える	3.45 (0.57)	3.83 (0.38)
	17) 人々の健康生活や健康文化の創造に貢献する自らの取り組みを示す	3.55 (0.63)	3.79 (0.49)
	18) 次世代の高度実践看護師を養成する高等教育を担う	3.41 (0.82)	3.66 (0.67)
全体		3.42 (0.64)	3.73 (0.54)

に平均値の低い項目は、DP5の13) 現行の制度やシステムについて、国内外の専門職との連携の視点から自己の見解を示すという項目3.03(0.68)であった。図3に各項目の回答の構成比を示した。

(2) DPの能力が必要とされる程度

現在の業務や活動にDPの能力が必要とされる程度の全体の平均値は、3.73(0.54)であり、平均値の高い項目はDP3の7) 最新の看護学の知識

や技術、看護関連分野の知見等を自らの活動と関連付けて説明するという項目3.83(0.47)、DP4の11) 研究成果や実践における実績を社会に還元するという項目3.83(0.38)、そしてDP6の16) 新しいエビデンスや看護学の知見を次世代に伝えるという項目3.83(0.38)であった。平均値の最も低い項目は、DP2の5) 国際的・学際的な視点を踏まえて、看護学の知識や技術に関する研究を計画

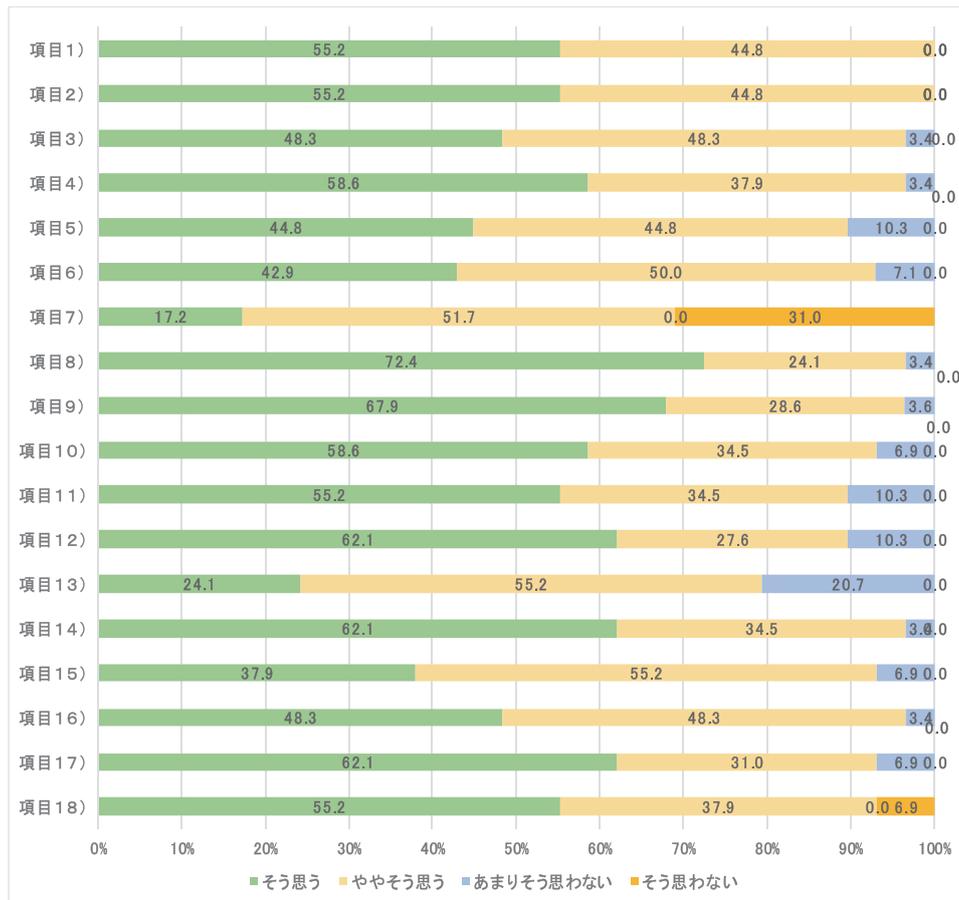


図3 博士後期課程のDPに基づく教育内容の適切性回答の構成比

し実施するという項目3.55(0.69)であった。図4に各項目の回答の構成比を示した。

V. 考察

1. 看護学研究科のDPの設定について

現在の活動や業務にDPの能力が必要とされる程度は、最も低い項目でも3.22、博士後期課程ではすべての項目が3.55以上であった。この結果は、看護学研究科のDPは、修了生に必要な能力の設定となっていると評価することができる結果だと考える。

同時に、今回の結果からは、修了後どのような場で働くかによって、必要とする能力が違っていることも見いだされた。博士後期課程の回答者は86.2%が教育・研究機関で勤務している者である一方、博士前期課程の回答者は医療機関で勤務している者が61.7%、教育・研究機関で勤務している者が32.6%であり、進学の動機も目的も様々で

ある。その結果、DP5(教育研究能力)、DP6(グローバルな視点)に関わる項目で「必要ない」「あまり必要ない」と回答した者が認められたのではないかと考える。

近藤ら(2005)は、看護系大学院修士課程学生251名を対象として入学志望動機・目的と修了後の進路の関連をみる研究を行っている。その結果、教育・研究職を目指す群と、臨床現場で働くことを希望している群の比較において、教育・研究職を目指す群で「研究の必要性」を入学志望動機とするものが有意に高く、臨床現場で働くことを希望している群において「専門看護師の資格の取得」を入学志望動機とするものが有意に高かったことが示されている。職業で求められる固有のコンピテンスがあり、入学志望動機もそれに左右されることが明らかである。

文科省は「大学院(修士課程・専門職学位課程)における看護系高度専門職業人養成のあり方に関

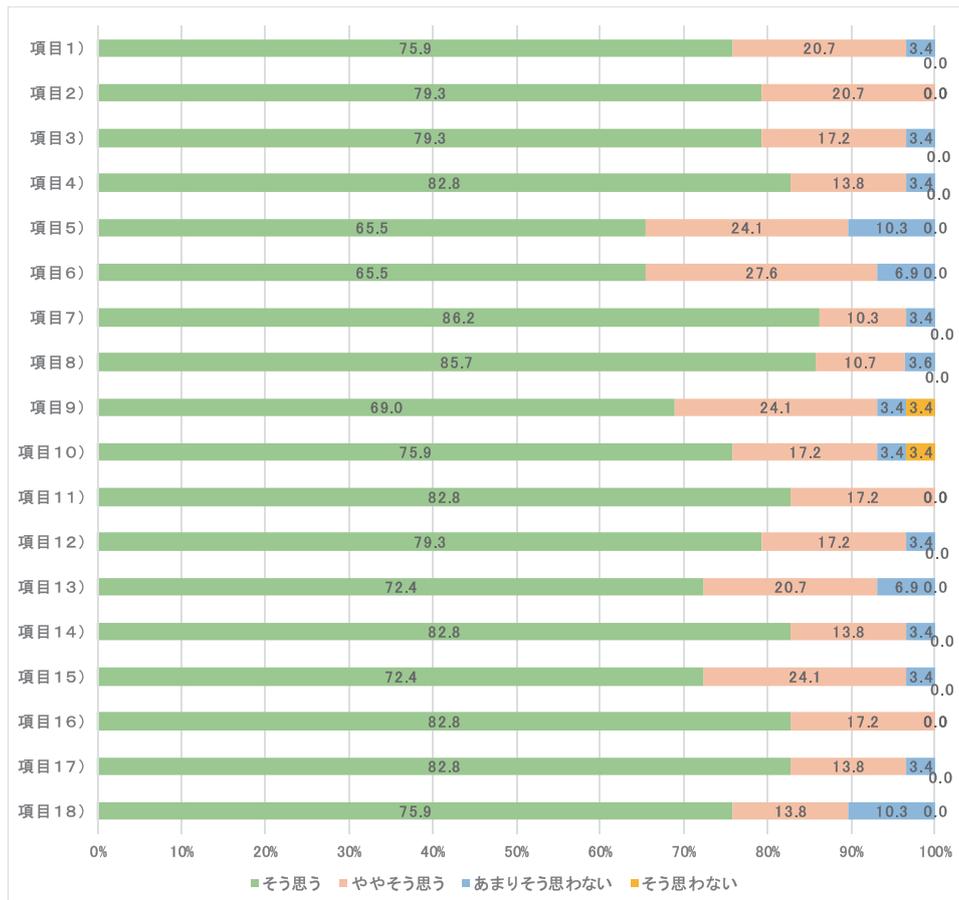


図4 博士後期課程：現在の業務や活動で必要とされる能力の程度回答の構成比

する論点及びこれまでの意見等」の教育の質の保証において、大学院では「職業に固有のコンピテンスに加えて、修士課程を終えた人材として共通に求められるコンピテンスも育成することが求められる」と述べている。DP5（教育研究能力）やDP6（グローバルな視点）は、大学院教育を終えた人材として共通に求められるコンピテンスとして必要な項目であるといえる。同時に、直接入学動機に関連しない、修了後に必要がないと認識されるこのような能力の育成と発展こそ、教育の在り方を注視する必要があると考える。

2. 看護学研究科の教育

看護学研究科の教育への満足度は、両課程ともに各項目3.5以上であった。教育への満足度は評価できる数値であったといえる。しかし、教育内容の適切性については、博士前期課程のDP6（グローバルな視点）、博士後期課程におけるDP

3、DP5が低かった。以下には、それらの結果の検討と取り組みについて述べる。

1) 博士前期課程

博士前期課程の教育内容の適切性については、DP6（グローバルな視点）の16) 17) の2項目が低かった。これらは、グローバル化、異なる文化への感受性についての項目であった。グローバル化、異なる文化への感受性の強化の対策として、すでにいくつかの取り組みが始まっている。例えば、本学では、2020年度より災害・国際看護学領域が新たに開設され、副専攻プログラムもスタートし、他領域の学生も受講可能となった。また、COVID-19感染拡大前2019年には、海外の協定大学院への大学院生の短期留学を実施した。COVID-19感染拡大後は遠隔で海外講師を、講師、ゲストスピーカーとして招いての講義などを積極的に進めている。そこでは、COVID-19など、今

世界で協働して取り組むべき課題、または、生活に根づいた文化に注目した講義を実施した。

末松(2017)は、文科省によって示された高等教育機関で育成するグローバル人材像についての議論を整理し、「従来は語学の熟練＝グローバルと理解されがちであったが、近年は語学のみならず、傾聴力、情報発信力、交渉力を含むコミュニケーション能力や多様性の受容、論理的思考力、問題解決能力、チームで協働する力、行動力、など、より幅広い側面で捉えられるようになってきている」ことを示した。しかし、学生の中にも、グローバル＝語学の熟練という意識は強いことがわかれる。今後は、今まで行われているグローバル化に向けた教育の取り組みを継続するとともに、学生自身がグローバルな力を再定義し、修了後も使える能力として自律的に学ぶ仕組みづくりが重要であると考えられる。

2) 博士後期課程

博士後期課程の教育内容の適切性については、DP3の7)が最も平均値が低く、次いでDP5の13)が低かった。この2つの項目は自らの活動と関連づけて説明する、自己の見解を示す項目であり、自分自身の専門領域の科目の履修や研究指導におけるディスカッションによって身につく能力である。DP3の7)は、現在の活動や能力にDPの能力が必要とされる程度では、平均値が最も高かった。調査の範囲では、当該能力は他と比して最も必要と認識しているが、教育内容の適正性として、授業等で提供されている内容が看護学およびその関連分野に関する最新の知見等ではないと判断しているのか、あるいはそれらを自らの活動と関連づけて説明することができていないのかのいずれかと考えられる。前者に関して、中央教育審議会大学分科会(2019)は、「各課程に共通して求められる教育等の在り方」として、「学修課題を複数の科目等を通して体系的に履修することで、関連する分野の基礎的素養の涵養を図り、学際的な分野への対応能力を含めた専門的知識を活用・

応用する能力を培うコースワークの充実が必要である」と述べている。また、福井ら(2021)は、「学際的な教育研究活動」は「複雑な課題の解決、革新的な知見や科学技術を生み出すことに対する社会的期待が、専門分野を利用した知見の統合に主眼をおく学際性推進の背景にある」と述べており、本課程では、専攻共通科目においてイノベーション看護学および国際看護学を配置し、他の学問領域と協働したイノベティブな内容を共有できるように一定の対応をしている。しかし社会の変革も踏まえ学生の意見も聞きながら、社会に即した内容の継続的な更新は必要と思われる。

後者に関しては、Repko(2013)は、学際性を「専門分野の間にあり、異なる専門分野にまたがり、かつ全専門分野を超えるもの」と述べている。しかし、菅原(2017)は、医療・看護が用いる「学際」は、「医療において専門職間の協働が他の学問分野よりも重要性が高いと認識されている(分野の融合に重要性が見出されていない)ことに由来すると思われる」とし、医療以外の分野との連携を想定していないと述べており、看護領域には他の分野との連携をあまり重視しない文化が根底にあり、本調査結果はそれらも影響していると考えられる。異文化との壁を看護学の側からブレークスルーする方略の検討およびそれらを教育の中に如何に組み込むかが今後の課題と思われる。

3. 調査の限界と今後の展望

今回の調査は、現行DP適用以前の修了生も対象としており、また受けた教育内容を想起して適切性を回答することを求めておらず、解釈には限界がある。今後は、評価の方法や分析の方法等の洗練化についても検討し、大学院教育の改善につなげていきたい。

VI. 結論

1. 看護学研究科のDPは、博士前期課程、博士後期課程ともに、修了生に必要な能力の設定となっていると評価することができた。

2. 博士前期課程DPに基づく教育内容の適切性について、全体の平均値は、3.36(0.64)であり、最も平均値が高い項目は、研究に関わる倫理的問題への対応に関する項目、最も平均値が低い項目は、異なる文化への感受性に関する項目であった。
3. 博士前期課程を修了した学生が、現在の業務や活動にDPの能力が必要とされる程度の全体の平均値は、3.61(0.59)であり、平均値が最も高い項目は、互いを尊重したコミュニケーションに関する項目で、平均値が最も低かったのは、グローバル化における健康問題に関する項目であった。
4. 博士後期課程DPに基づく教育内容の適切性について、全体の平均値は、3.42(0.64)であり、平均値が最も高い項目は、倫理的・文化的視点を踏まえて、研究や実践を通して新たな見解や知識を生み出すという項目で、平均値が最も低い項目は、最新の看護学の知識や技術、看護関連分野の知見等を自らの活動と関連付けて説明するという項目であった。この項目は標準偏差も他の項目に比して大きく、評価の個人差がうかがえた。
5. 現在の業務や活動にDPの能力が必要とされる程度の全体の平均値は、3.73(0.54)であり、平均値の高い項目は最新の看護学の知識や技術、看護関連分野の知見等を自らの活動と関連付けて説明するという項目で、平均値の最も低い項目は、国際的・学際的な視点を踏まえて、看護学の知識や技術に関する研究を計画し実施するという項目であった。
6. これらの結果をふまえて、今後、学びを再定義し、身につけた能力を修了後も継続して発展させていけるようなサポート、学生自身が獲得する能力を意識して自律的に学べるシステム作りなどの課題を明らかにした。

謝辞

本調査にご協力いただきました修了生のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

引用・参考文献

- ・中央教育審議会：2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申），文部科学省，2018.
https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf（参照 2022-9）
- ・中央教育審議会大学分科会：2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～（審議まとめ），文部科学省，15，2019.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2019/02/18/1412981_001r.pdf
- ・大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会：配布資料3 大学院（修士課程・専門職学位課程）における看護系高度専門職業人養成の在り方に関する論点及びこれまでの意見等，文部科学省，2010.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/siryu/attach/1299990.htm（参照2022-9）
- ・福井文威，新見有紀子，林隆之：学際的な教育研究に対する大学の戦略—日米英の戦略文書の比較分析—，大学経営政策研究，11，1-18，2021.
- ・呉書雅，高森智嗣：福島大学大学院教育成果の検証—修了生アンケート・企業アンケートの調査結果から—，福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要，4，27-34，2021.
- ・Repko, A. F.: *Interdisciplinary Research : Process and Theory*, Second edition, Sage Publications, Inc. / 光藤宏行, 大沼夏子, 阿部宏美他, 訳: *学際研究 プロセスと理論*, 九州大学出版社, 2013.
- ・末松和子: 「内なる国際化」でグローバル人材を育てる—国際郷愁を通じたカリキュラムの国際化—, 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 3, 41-51, 2017.
- ・菅原裕輝: 看護学の学際, 千葉看会誌, 22(2), 36-37, 2017.

